邪馬台国所在地論争と古代測量術

野上道男（会員）

ホームページ　http://www006.upp.so-net.ne.jp/mnogami/

東京地学協会春季講演会2013

魏志倭人伝

三世紀末：　「陳寿」が書いた中国の正史「三国志」
三国とは、魏（洛陽、曹操）　蜀（成都、劉備）　呉（南京、孫権）

・漢代（BC100年頃）に、朝鮮半島北部に中国の植民地「楽浪郡」（今の平壌）が置かれた
・後漢になると、遼東の公孫氏が独立性を強め、さらに南方に「帯方郡」（沙里院）を置く
・後漢末：農民一揆：黄巾の乱（183年）などがあり、三国時代へ
・魏の宰相「司馬懿」は蜀の宰相「諸葛孔明」との全面戦争を避け、その死後に、
　遼東の公孫氏を滅ぼし（238年）、魏で勢力を拡大し、司馬氏の晋となる
・倭人伝は晋代に書かれ、公孫氏滅亡直後の魏への卑弥呼遣使の記事から始まる（239年）
魏志のうち、烏丸鮮卑東夷伝：
　中国（漢民族の華夏、いわゆる中原）以外が野蛮国．東夷・南蛮、北狄・西戎（遊牧民）
・東夷伝：　扶余・高句麗・東沃沮・邑婁・濊・韓・倭（人）
・倭人条：（通称：倭人伝）2000文字．　同時代史あるいは地誌
　倭30ヶ国の記載（位置、地形・産物・役人名、戸数など）
　風俗・植生・　中国との外交史（これだけが歴史記述）

N30W
高句麗
集安
40N
朝鮮民主主義人民共和国
DEMOCRATIC PEOPLE'S REPUBLIC OF KOREA
遼東郡
(遼陽)
洛浪郡(平壌)
帯刀郡(沙里院)
幽州
大韓民国
REPUBLIC OF KOREA
辰韓
扶余
慶州
馬韓
弁韓
狗邪韓国(巨済島)
35N
魏都洛陽
伊都国
末盧国
邪馬台国
投馬国
呉都建業
130E
125E
30N
黄海
Yellow Sea
渤海
東シナ海
長江(揚子江)
万里の長城

ご当地　邪馬台国の乱立（現状）

発端の理由：　どうしてそんなことになったのか

・魏志の著者（陳寿）が倭諸国の位置を遣倭使の行程のような方法で記述した
・復路の記事全体を省略して、その一部を往路記事に挿入した．そのため、
　魏使の到着港が「唐津」（末盧＝松浦）だと誤解された．

・次の伊都国を怡土（風土記の地名、糸島という地名も現在ある）とした．
　（ここまでは確実という、いわゆる通説の誤り）
・国内位置記述の出発点が誤っていたため、
　そこから後に記述される倭の諸国の位置はメチャメチャになった．

・「万世一系」は敗戦で皇国史観と共に崩れた．その反動で（津田左右吉へ文化勲章）、
　記紀の神話を否定するのが科学的、とする風潮が歴史界に広がる．
　結果として「神武東遷」を否定し、戦前にはなかった日本の中心＝近畿という
　地域観が広まった．　それには邪馬台国＝倭国＝ヤマト　という図式が必要である

現状：
　九州説では乱立したご当地邪馬台国が地域振興に役立ち、近畿説では、弥生時代末期以後の地域王権を認めず、地方の前方後円墳をヤマト政権に屈服した証拠とする、従って纒向の箸墓（前方後円墳）が卑弥呼の冢でなければならない－－という命題となる

邪馬台国とは　　「南至邪馬壱国女王之所都、水行十日陸行一月」
（私の解釈では、首相の出身県のようなもので、どこにあろうと重大事ではないが）

（伊都国から）南の邪馬台国まで、船なら（筑後川・有明海経由）で芦北付近まで10日、
陸路なら（橋・渡し不要の）分水嶺の 山道（阿蘇外輪経由）で１ヶ月と解釈.

従って、邪馬台国は人吉盆地から宮崎平野のあたり、となる
投馬国はその南の鹿児島あたり．投馬は遠間か「殺馬」（サツマ）の書き換え.
（サッはアイヌ語と同じで、乾いた土地の意味．シラス台地のことだろう）

・卑弥呼＝アマテラス　説では、傍証は天の岩戸伝説と日食とされる．　しかし
開始から終了まで最大30分程度．始まってからではイベントは間に合わない
ただし、日没直前の皆既食（太陽が欠けて沈み、そのまま夜）は恐怖だろう.
・野上説：２世紀末のタウポ火山（NZ北島）大噴火で太陽が光を失った
南極アイスコアの２世紀末付近に、非海塩性硫酸イオンの増加あり
・中国では黄巾の乱（資治通鑑183年の記事、俚言に曰く）
「蒼天已死 黄天當立 歳在甲子 天下大吉」（後漢書71巻）
甲子（184）年には回復している．空が黄色になったのは181年だろう
後漢書・資治通鑑に、181年夏6月（旧暦）、卵のような雹、の記事がある
・日本では崇神5／6年が大疫（飢饉）．　7年は豊作（日本書紀）とある

邪馬台国とは　　「南至邪馬壱国女王之所都、水行十日陸行一月」

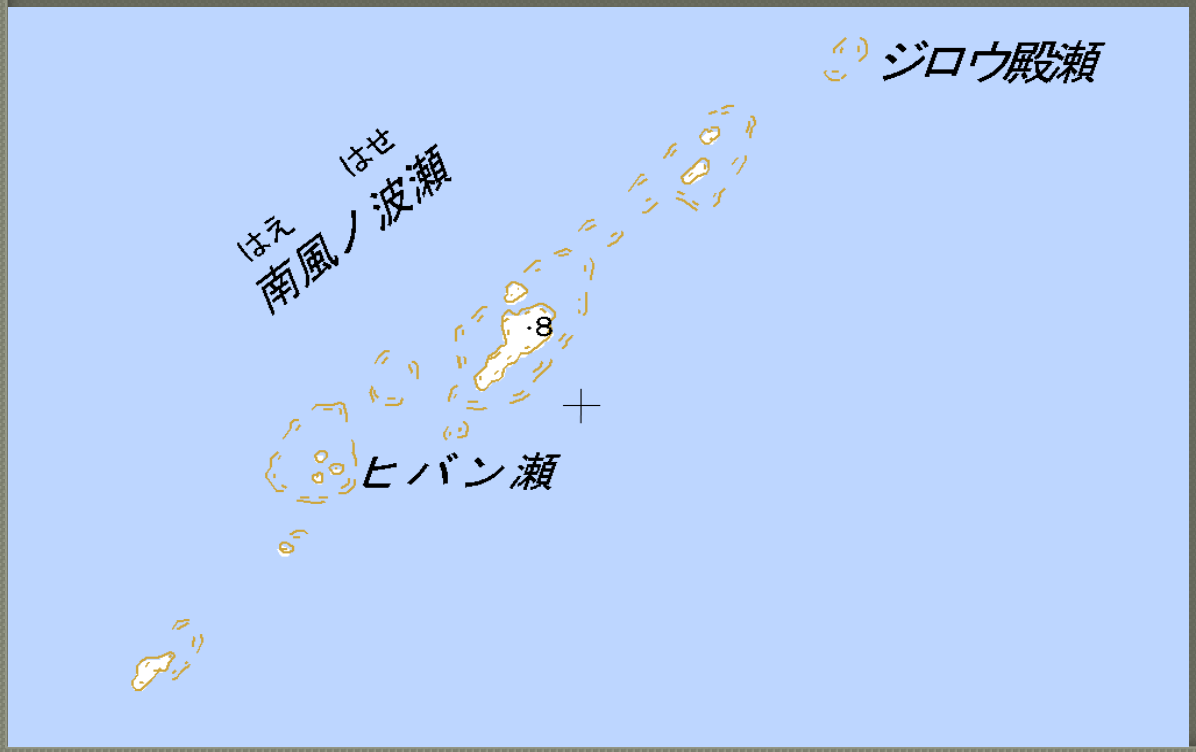
・ヤマイチかヤマタイか　　臺（台の旧字）　壹（壱の旧字）
　――「ヤマ田のある」と読む．　アイヌ語のカムイは「カミの居る」
・行程の解釈
　水行１０日の後、引き続き、陸行一月　　順次読み
　水行なら１０日、（あるいは）陸行なら一月　放射読み　か

・最大の論点とすべきは「都する」か「都せし」であろう（漢文の時制）
　私は過去形で「都せし」と読む（この解釈をする歴史家の前例はない？）
・弥生時代の先進地域（玄海灘の沿岸）からみたら、南の邪馬台国は僻地
　（近畿説のように、東と解釈しても）、高度な弥生遺跡がない．
・卑弥呼は邪馬台国の女王であったが、その出身地（邪馬台国：南九州）を
　離れて倭国の女王となり、「伊都国」にあった宮殿に住んでいた．
　倭に北来た魏使に宮殿もその冢（はか）も見学されている．
・倭国は直轄の国土もなく国民もいない連合国である（諸国が女王に立てた）．
　すなわち、倭国 ≠ 邪馬台国　である　（「＝」としている誤解が多い）
　邪馬台国＝女王国、倭国＝女王国　女王は同一人物（卑弥呼）であるが、
　その時代に差があった．

方位問題　　はたして、南は南（S）？

発端は国土地理院の地図

- 普通　北は N と信じている（せいぜい磁北）．　しかし
- N30W を北とする方が東夷伝の記述内容に合っている
- N60E は夏至の日の出方向である
　（緯度 35 ±3 度の範囲で適用できる）



対馬北端

岩礁の配列から
　この方向（東北－西南）に連なる
　波が立つ．これは直角方向の
　東南風による波と同じである
漁師言葉でこの風を「ハエ」という
　南風(ハエ)は黒潮文化圏の共通語
（小笠原高気圧張出し時の季節風）
　つまり、南＝ N150E

N30W　を北とする古代文書の例（東夷伝以外）

・日本書紀（720年編纂）の崇神65年の条
　任那者去筑紫国二千余里北阻海以在鶏林之西南
　　（鶏林は新羅、首都は現在の慶州）
　筑紫の北（N）は日本海．任那の方向は西北である．これを北と表現している
　慶州の南南西が半島の南の沿岸地域、よって南は東（E)に寄っている
・風土記（8世紀初め頃）豊後国速見の郡（こおり）の条
　郡衙と　別府温泉の赤湯（血の池地獄）・玖倍理湯（間欠泉）などとの
　位置関係から、西という記述を SW とすると、記述の位置があう

その他、風土記には多数（大部分）の例がある．

通説は倭人伝の方位を間違えている　！！

壱岐からの到着港を唐津（末盧国、松浦半島）とする
次は、「東南陸行至伊都国」とあるにもかかわらず、通説では
風土記に「怡土」とある糸島半島－前原付近に伊都国を比定する

この方向は地図では東北東であり、「原文の方位は間違っている」とされる
さらに、「南」に邪馬台国があるというのは間違いで
　　邪馬台国は、「東」の近畿地方に存在した、
　中国人は方向を間違える．そのまま信用しない方がよい、ということになる
・古代の日本の中心はヤマト朝廷があった近畿地方であるから、倭人伝の行程
　距離など、初めから無視しても良い資料である
　　－－という意見となる（邪馬台国近畿説）
野上の意見：
　それなら「邪馬台国」「卑弥呼」という地名や名前も無視すればよいのに　！
　弥生時代の先進地域から見て、僻地の邪馬台国をなぜ近畿に欲しがるのか　？
　　倭人伝が倭（日本として）を扱った最初の歴史文書だから
　→　卑弥呼を記紀に登場する女性に当てはめる必要が生じる－－無理なこと
　（しかし、候補は神功皇后、ヤマトトトモモソ姫：箸墓古墳、アマテラス）

通説の解釈は倭人伝の方位を間違えている　！！

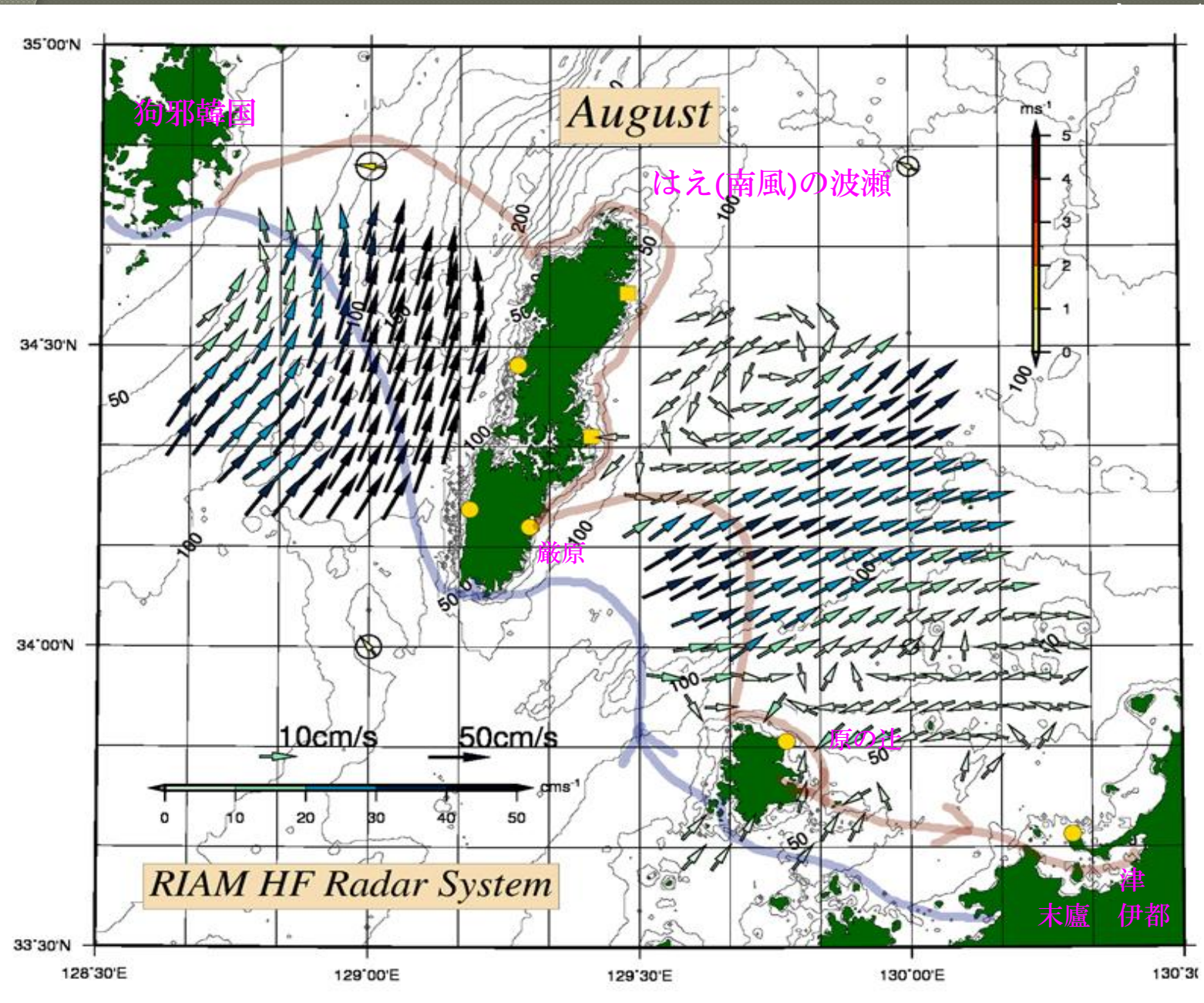
遣倭使の壱岐からの到着港は那の津（博多）である　！　　－－野上の新解釈
原文「郡使倭国皆臨津、捜露伝送文書賜遺之物詣女王不得差錯」、
　これは倭人伝に出てくる唯一の港の記述であり、一大卒という役人（伊都国在駐）が
　外交文書や贈答品を管理（通関）していることを記述している．ここが到着港である

原文では、一大（壱岐）国から
「渡一海千余里至末盧国」中略（１）「東南陸行五百里到伊都国」とある．
　（津が到着港となっていない！　しかし）
・著者「陳寿」は復路の記事を全部省略し、魏使の報告にあった復路の記事を
　　合理的に修正して往路部分に挿入した．　すなわち、復路について、
　　伊都国から「西北陸行五百里到末盧国」を書き換えて（１）とした．
　　魏使の報告書では、（末盧国から）「渡一海至壱岐国」となっていたであろう
　　従って、壱岐国と北九州の港の間については、往路と復路が異なるので
　　方位を記述できないはずである．事実原文には、方位は記されていない．

なぜ対馬海峡横断の往路と復路が異なるのか　－－　その理由が判明した．

対馬海峡の海流－８月の平均値　九州大学応用力学研究所作成

吉川裕氏の好意による）

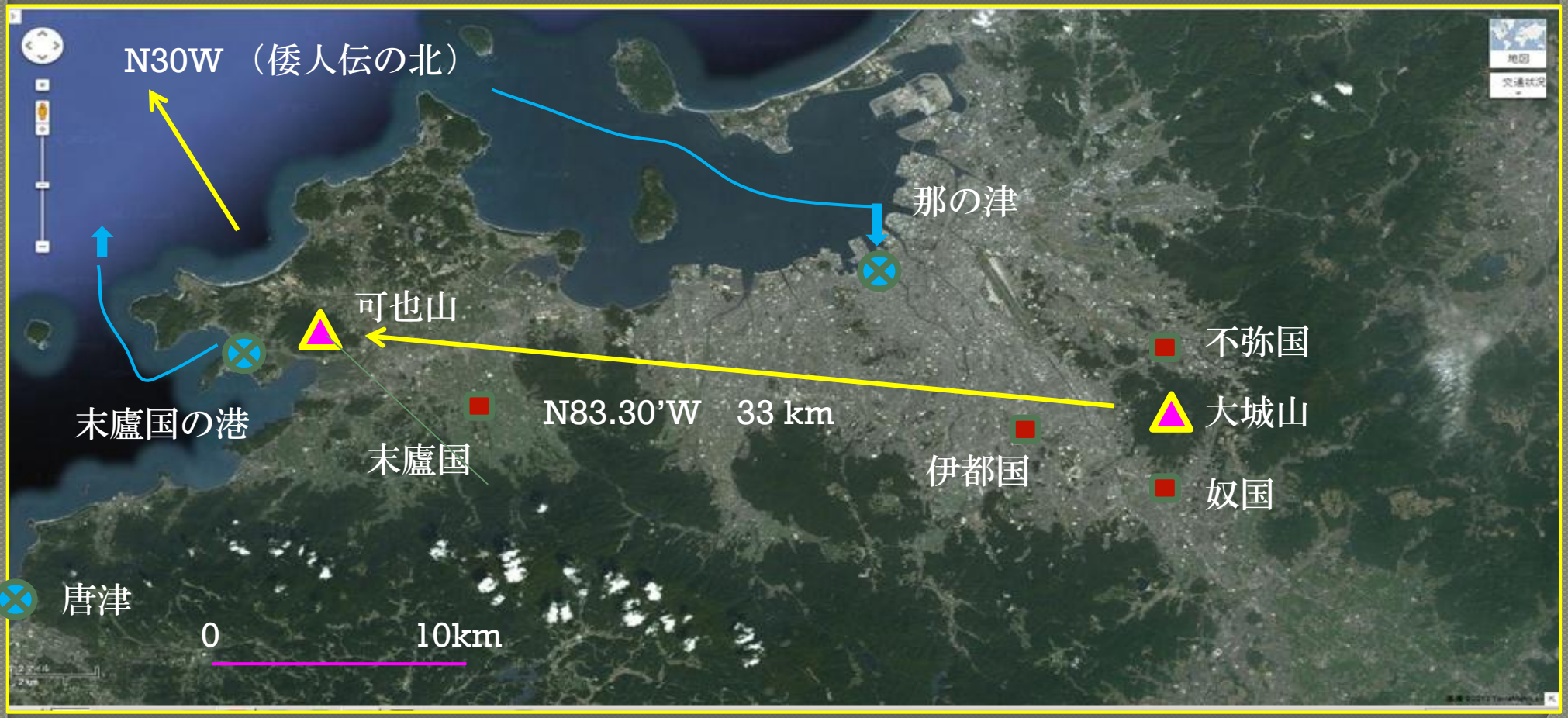


小円内は風向
（東南風が卓越）

漢字および想定航路
－－野上が記入

倭の主要国の位置

原文「 東南陸行五百里、到伊都国 」　（東南はN105E、千里は約67km）



倭人伝の方位システム
　N30Wが北、N150Eが南、 N60Eが東（夏至の日の出方向）

日本人の方位感覚
　－－　日本人には古代の方位感覚がしみついている　－－

・江戸から見て西国大名とは西（N120W）の中国・四国・九州の国を指す
　（N90W）の線は敦賀のあたりで日本海に出る．実際は西南西～西南である．
・江戸から見て、東北列藩とは東北（N15E）地方の国を指す．
　（N45E）の線は鹿島灘のあたりで太平洋に出る．実際は北～北北東である．
・佐賀平野の人々は、天山（△1046m）を北だといっている．実際はNWである．
・九州では南西諸島のヒトを西さんという．西は上海方向で島はない
　　実際は西南（ N135W方向）方向である

夏至の日の出方向は　北緯 40度で　N58E
　　38度で　N59E
　　37度で　N60E
　　36度で　N60E
　　35度で　N61E
　　34度で　N61E
　　30度で　N62E

倭人伝の方位

見通しがあれば、目的地の方向（方位）はわかる．しかし

港から港、平野の町から町　という場合、普通は見通しは得られれない．

見通しのない目的地への方位はどのようにして知ったか

・目的地の近くに見通せる地標（山）があれば、近似できる

出発地の近くに山があり、そこに登れば目的地が見通せるならそれでも良い．

それも不可能なとき

ＡＢの２点間にＣ点を設ける．Ｃ点からＡ Ｂ点が見通せるとする．

（Ｃ点は平野を隔てる山脈の稜線になるだろう）

Ｃ点に２本の杖（鉾）を立て、C_1、C_2 とする

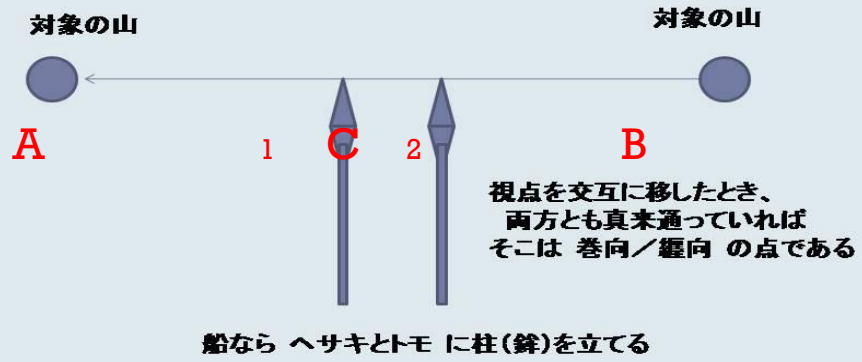
C_2からみて C_1 の先にＡが見通せて、

C_1 からみて C_2 の先にＢが見通せるなら、

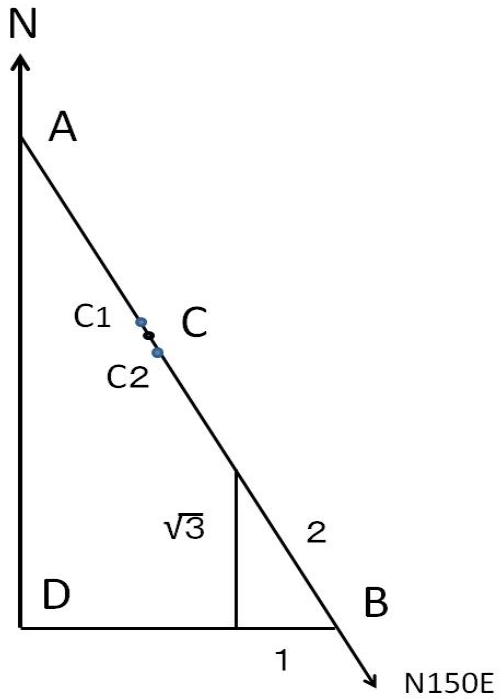
Ｃ点はＡＢを結ぶ線上にある．

このようなＣ点を稜線上で探すことが古代測量（山当て）である．

「真来向く」点の測量



「真来通る」線の測量

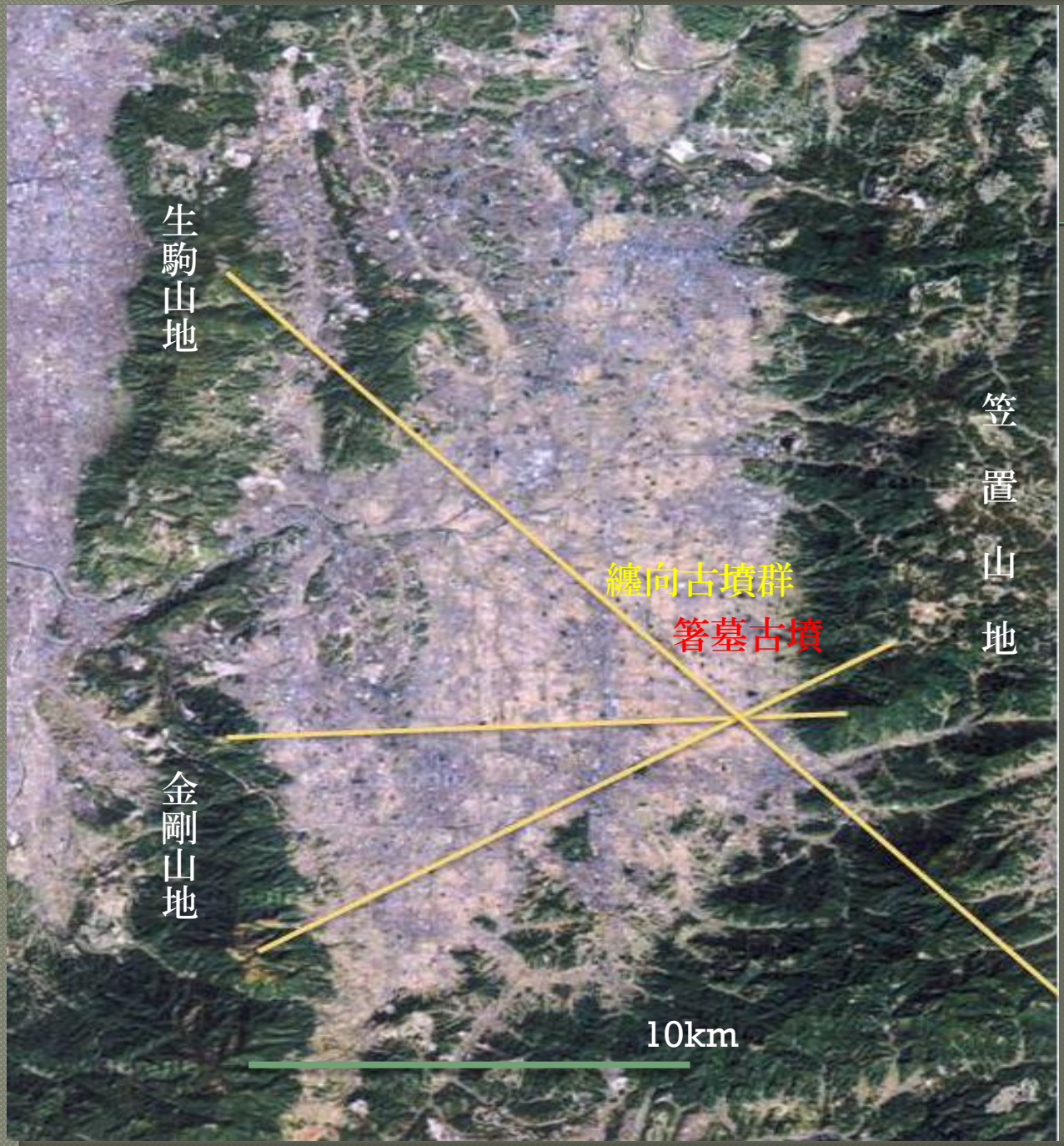


C 点をＡＢの真来向く点という．
（ただし野上の命名）
直線 ACB を真来通る線という．

真来向く点は古代には吉祥の地
都市遺跡、古墳、官衙（国府・郡家）
の立地に考慮されている．

古代測量術による立地の実例
魚沼盆地（越後）

奈良盆地の例

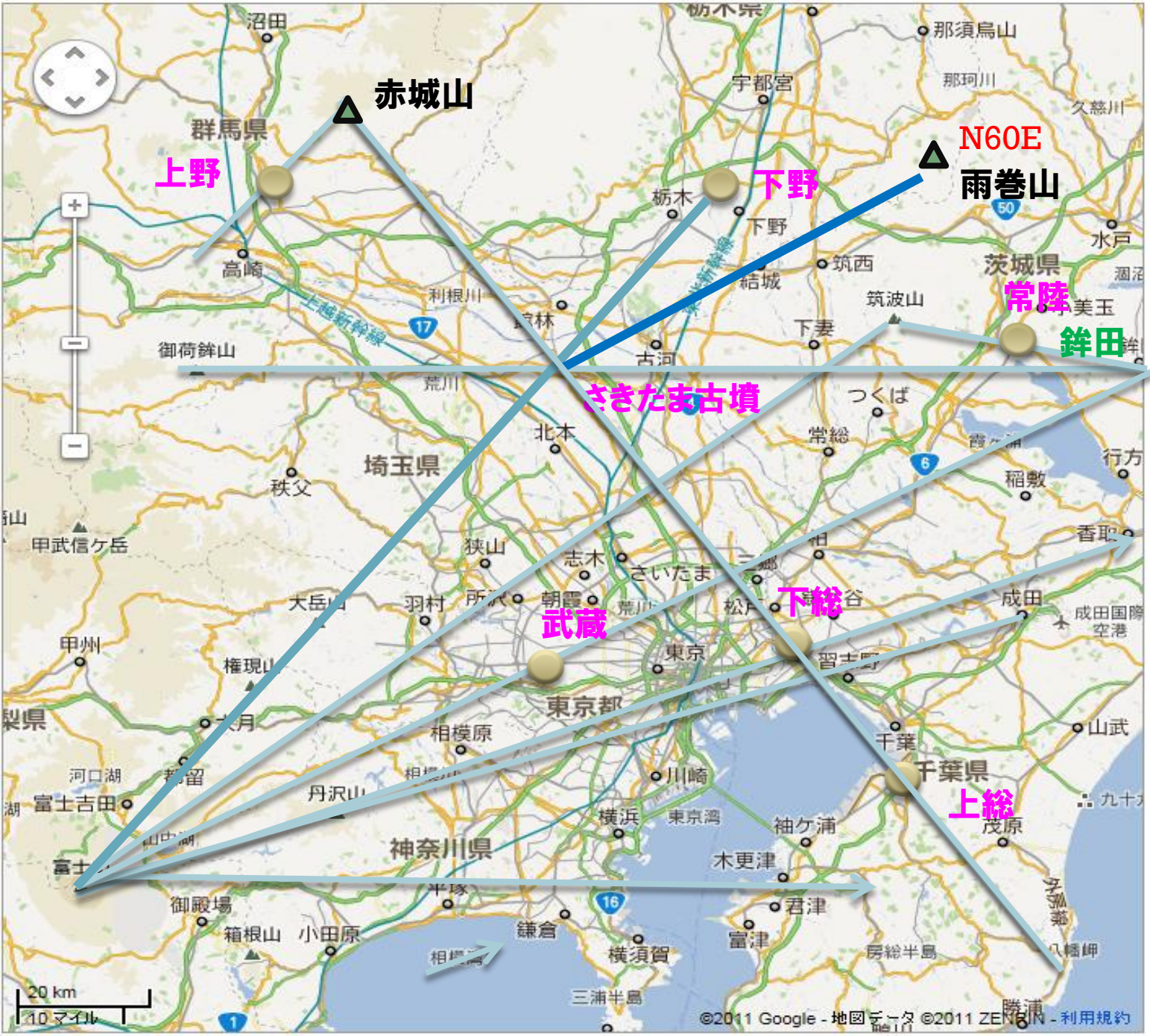


箸墓古墳（纏向古墳群）の場合

N50.59’E
金剛山山稜北端－－耳成山－－　箸墓古墳－－　・300m点－－竜王山
　1094m　　△139.2m　　100m　　300m　　△585.5m

N84.41’E
二上山雄岳－－　箸墓古墳－－巻向山
（・517m地点）　　△566.9m
N102.41’E
・264m地点－－　箸墓古墳－－三輪山
（香芝市西北部）　　△466.8m
N135.10’E
生駒山　－－－－　松尾山－－－－－－箸墓古墳－－大神神社－－外鎌山
△642.0m（6.5km）△315.1m（15km）　　△292.4m

竜（東）にちなむ次の東西（W-E）線は見通しに中継点が必要である．
仁徳天皇陵－－応神天皇陵－－－－－215m稜線－－－－－竜王山
　44m　　60m　　（4.8km）　　（19.5km）△585.5m



古代測量（山当て）

このように山（地標）の位置を決める（測量する）ことを 山当て/ 山立て　という.

「山をかける」「山カン」の語源であるが、海の人々には生活と生命がかかっている

これを陸上だけで行うことを「国見み」という．九州に特に多い「国見山」はこれにちなむ地名である

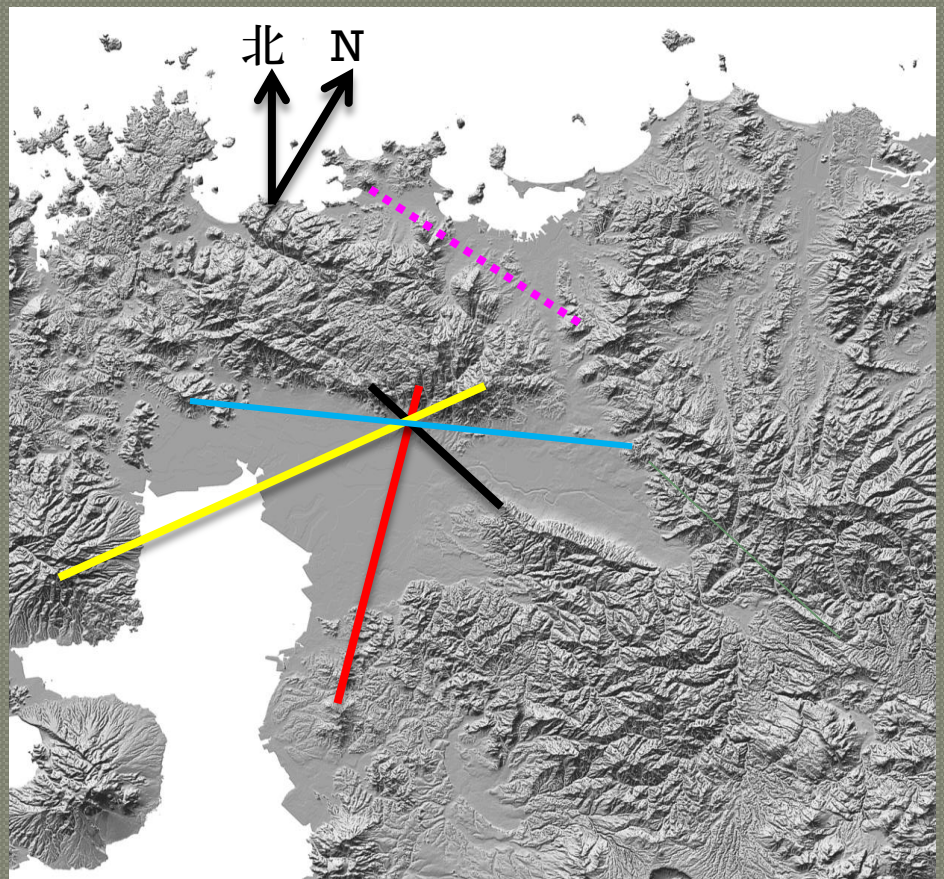
各地の富士山、館山・立山なども、これを語源としている

鳥居の笠木から由来する○笠山、笠○山も古代測量に使われた山の名前である.

出雲国風土記でカミナビ山樋

吉野ヶ里遺跡の立地

発掘された建造跡は倭人伝の記述にある「卑弥呼の宮殿」と同じ様式である
沖積地を前にした低い丘陵が広がっている．そのうち、なぜそこが選ばれたか
－－立地の理由：　何重にも「真来向く」地であるから　！



金立山－吉野ヶ里－高良山（N102E）

石谷山－吉野ヶ里－多良岳（N215E）

大高山－吉野ヶ里－三池山（N162E）

大平山－吉野ヶ里－両子山（N68E）

吉野ヶ里から雲仙岳（約1400m）は見える
N188E　　63km

倭人伝の距離

千里＝約67km　の根拠（１）

道路距離は測れない－－道路沿いに測る道線法（伊能忠敬）は屈曲が多いと誤差が蓄積．
航路距離も測れない．　従って行程距離は、すべて地標（山）間の直線距離である．

１）郡（沙里院）から狗邪韓国（巨済島）まで約490km、これが7000余里
　　１里＝約70m弱

２）巨済島から対馬（千俵蒔山）まで66.7km、これが千余里．1里＝約66m

３）対馬の有明山（厳原背後）から岳（壱岐）まで約66km　これが千余里

４）壱岐から（那の）津まで66.6km、これが千余里．1里＝約66m（往路）

５）伊都国（大城山）から末盧国（可也山）まで33.0km、これが500里
　　１里＝66m

６）女王国の東千余里、倭種の国、四国のことだとすれば
　　臼杵－八幡浜（N57E）が70km、　１里＝70m

倭人伝の距離

千里＝約67km　の根拠（２）

７）遼東（郡）の東千里に高句麗発祥の地：五女山（遼寧省本渓市）
・遼東郡がどこにあったかで、方位は変わる．しかし距離は約67km
・講談社版の注による集安市（吉林省）なら
＜ほぼＥ方向262km＞ よって１里＝262m　－－－この注の記事は間違い
世界遺産では集安市（好太王／広開土王碑・将軍塚古墳など）と本渓市をペアにして認定

８）韓は方四千里．　ミョラク（滅悪）山脈以南として、
平行四辺形のほぼ東西250km、ほぼ南北330km
よって方287km、　1里＝約72m

９）倭国（九州島）は周旋5000余里
西を福江島、東を鶴御崎、北を企救半島、南を佐田岬として、
距離はいずれも、約328km、　１里＝約65m

倭人伝の距離

千里＝約67km　の根拠（３）

日本書紀：崇神65年の記事「任那者去筑紫国二千余里北阻海以在鶏林之西南」

任那・筑紫・鶏林（新羅のこと）という地名から判断して、
崇神65年ごろの地理認識ではなく、書紀編纂時（720年）のものである
２世紀末のタウポ火山（NZ）大噴火を崇神5・6年の飢饉の年とした.
中国では甲子の年（184年）に気候回復．日本では崇神7年に回復している.
よって崇神65年は242年.　　（卑弥呼の最初の遣使は239年）

身体尺で親指と人差し指を広げた間隔を尺（語源どおり）約18.5cmとすると、
　６尺＝１歩（1.11m）、60歩＝１里＝ 66.6m となる
（古事記には周尺（20cm弱）が使われていたらしい）

韓半島南岸と九州島北岸の距離は約190km.　　これが二千余里
　よって、１里は約95m.
古韓尺＝26.7cm（新井宏、2007）だとすると、
　１歩＝160cm、　１里が60歩で96m
　！！　古事記・日本書紀に天平尺が使われていない　！！

従来説（通説）と異なる点（まとめ）

- 方位：　北はN30W、東はN60E（夏至の日の出方向）
- 距離：　地標間の直線距離　千里は約67km
- 天文測量が行われていた
- 地上測量は見通し線（山当て）測量だけ．航路・道路距離は測れない
- 特殊直角三角形を用いた三角測量はあったらしい
- 到着港は伊都国の「那の津」、復路は末盧国の港から
  その理由は対馬海峡の海流と卓越風向のため
- 往路の「東南五百里到伊都国」は
  復路の「西北五百里到末盧国」が往路に書き換えられたもの
- 卑弥呼が都せし邪馬台国は南九州にあった
- 卑弥呼が倭国女王となってからの宮殿・墓は伊都国（玄海沿岸）に．
- 倭国30ヶ国の位置をすべて推定した
- 倭人伝の地名は全て倭語で、呉音（南方方言）で漢字表現している

FIN

- ご静聴　ありがとう　ございました
- 野上道男

ご参考までに

http://www006.upp.so-net.ne.jp/mnogami/

魏志倭人伝・卑弥呼・日本書紀をつなぐ糸　（2012、古今書院）

関東平野北部の古代測量　雑誌「地理」52-2（2013）